震災からの復興活動に取り組むリーダーを、
短期・中期・長期の3つのフェーズで支援します

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders - Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート（2014.3.12-2014.9.11）

Contents

- P.1-3　右腕OG座談会
- P.4-6　震災から4年目、2014年度の方向性
- P.7-8　今季のトピックス
- P.9　プロジェクトの進捗・ご支援ご寄付のお願い

1 右腕OG座談会

192人。2014年8月末時点での「右腕」経験者の人数です。今回は「右腕OG座談会」と称して、東北に半年～1年間赴いて事業推進をサポートする右腕派遣プログラムに参加し、その後東京に戻って働いている女性を招いて、参加したきっかけや活動してみての感想、キャリアについてざっくばらんに語っていただきました。

宮本裕子さん・戸塚絵梨子さん・橋本かな子さん・村井香月さん

ーまずは、右腕の時の活動内容と、今は何をしていらっしゃるかをそれぞれ教えてください。

戸塚：2012年から会社のボランティア休職制度を利用して、岩手県釜石市の一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校で右腕としてお世話になりました。個人ボランティアや団体視察の受け入れ、仮設住宅に住む子どもたちへの自然教室運営をサポートしました。現在は、会社に復職しています。

橋本：2013年から1年間、会社の休職制度を使い、戸塚さんに続く右腕として一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校で活動していました。団体の基盤強化、外部から来るボランティアのケアやマネジメントを主にしていました。今年の3月から会社に復帰しています。

村井：2011年9月から1年間、宮城県南三陸町の南三陸復興ダコの会で活動していました。「オクトパス君」というキャラクターのグッズ製作・販売をしている団体で、活動開始当時は「復興支援としてタコの文鎮を作る」ということだけ決まっていました。販売戦略や広報、作り手のスタッフのとりまとめ役、リーダーの相談相手…など、何でもしていました。
現在は、東京で木を使ったグッズを製作している会社に勤務しています。

宮本：2012年2月からNPO法人せんだい・みやぎNPOセンターで活動しました。2013年1月に活動を終え、5月に地元・神奈川県藤沢市に戻り、まちづくりやNPOを応援する中間支援NPOを中心に活動しています。

ー戸塚さんと橋本さんは、会社の休職制度を利用して右腕に行かれたんですよね？

戸塚：もともと、青年海外協力隊やワーキングホリデーを対象とした「海外ボランティア休職制度」があり、それが震災後に国内での活動にも適用可能になりました。ただ、国内で活用する前例が無かったため、休職期間や後任の調整等があり、実際に休職するまで結局9か月ほど待ちました。

宮本：私も、青年海外協力隊へ行くための休職制度は社内にありましたが。ただ、私の場合はもともと「会社を辞めてNPOなどで違うことをしようかな」と考えていた時期だったので、辞めるという選択肢を選びました。

ただ、「会社を辞める」という決断って当時はものすごく勇気がいることだったので、一応「休職という形にはできますかね？」と聞いてみたんです。ですが、「辞めた後にまた戻ってくるのはありかもしれないけれど、休職にするのは難しい」ということで、結局退職することになりました。

ーそもそも、それまでゆかりの無かった土地・東北に行こうと思ったきっかけは何だったんですか？

村井：私はボランティアがきっかけです。もともと会社を辞めることは決めていたので、退職して時間ができた後に3週間ほど岩手へ行きました。力仕事以外のボランティアもしてみたんですが、それでも「もっとやれることがありそうなのに」と、もどかしくて。次の日帰るかもわからないボランティアには、任せられることは限られています。それは当たり前なんですが、受け入れる側も、ボランティア側も、お互いもう少し何ができるかよく考えればもっと良い成果が生み出せるんじゃないかと。ちょうどその頃、右腕派遣制度を知って、腑に落ちたというか。「まったくの個人で行くのは不安だけど、この仕組みだったら長期で行ってもいいかな」と、説明会もなしに応募しました。

橋本：私は、自分の中に**「世の中や人のために、自分が役に立つことをしたい」という想いがずっとありました。その想いを突き動かし、ここでやらなくてはという気持ちが形になって出てきたきっかけが、この震災だったんだと思います。**

東北にゆかりはありませんが、これだけ大きな災害が日本で起きたことに、自分の中に抱えていた想いが動き出しました。月に1度ほど通った短期ボランティアで初めて東北に足を踏み入れ、地元の方と触れ合う中で、その想いがどんどん強くなりました。

ー東北での生活を終えて東京に戻って、ギャップを感じることってありますか？

村井：私は昔から「ビジネス通した社会貢献をしたい」という軸が自分の中にあったので、復興ダコの会にたどり着いたのも、今の会社で働いているのも自然な流れだったと思います。私自身ギャップは感じていません。

戸塚さんと橋本さんは、**地域の小さな団体から東京の大企業に戻ってのギャップ**があるんじゃないですか？それって、いろいろ大変そうですよね。組織の規模が小さいと、物事を自分たちで決められたのではないですか？

橋本：それはありますね。**釜石では、普段思っていることを周りの人と共有しやすい環境**でした。物事を進めるにも形にしやすかったので、「一定の決められた枠の中でやらなければならない」という企業での環境とは違いました。

戸塚：私の場合、ストレスはほとんど感じませんでした。大企業の違和感、たとえば、この仕事はどこを目指しているんだろうとか、物事を決めるのに稟議を回して云々とかが、ひとつなぎ自然学校にはなかったので。

一方で、**自分に不足していた部分を強く感じました。企業の中にいたときは、自分で決めて進めるというより、決められた枠の中で、決められた営業メニューを売るという意識**で仕事をしたことに気づきました。

そうすると、批判精神だけが育ってしまう。批判するだけで自分には他の案が浮かばないし、浮かんだとしても自分でそれを成し遂げられるのかと。そういう部分を突き付けられましたね。復職してからは**「自分に不足していたマインド」を、会社を辞めるという手段ではなく、会社に戻って克服したい**と思うようになりました。それまで**「会社の駒」のような意識で働いていた事を反省し、意志のある社員として働く**心構えができました。

「ふるさと」の意味を考え、「ふるさと」を見つけた1年間

宮本：東京から「地域」に入ってみて、感じたことなどはありますか？

戸塚：私は東京出身で祖父母も近くに住んでいて、「ふるさと」という感覚がないまま生きてきました。自分にとって、生まれ育った街は東京。その東京で、釜石の人たちのような「ふるさとを想う熱量」を持たなきゃいけないのかなと思うこともあって。それが、東京に戻った理由のひとつです。釜石で「失われたふるさとの宝を取り戻す」「そのためにふるさとの復興やまちづくりを進めていく」という言葉をよく聞いていました。ずっと「ふるさとって何だろう」という問いを突き付けられていたような気がします。

橋本：うちは転勤族だったので、「出身」と聞かれると困ってしまうんです。いろんな地域に住み、小学校は4つ転校しています。釜石に居ても、**地元の方の「ふるさとを大切に思う心」が最初は全く分からなくて**、一年間のうち、半年くらいはずっと「？」でした。そもそも「ふるさと」とか「地域づくり」とか「地域を想う心」という考え方が自分の中になかったので。だけど、**自分が実際にその地域に住み、地域の人たちと関わり、地元の人たちが自分たちの手で地域をより良くしようと頑張っているのを間近で見ていく**中で、言葉では言えないけれど、徐々に「あ、そうか。これが故郷を想う心なのか」と腑に落ちていき、それから団体の活動の先にあるものも徐々に分かるようになりました。活動の中では、外部からこの地域に人が来て活動する意味を、ボランティアさんたちに丁寧に伝えていくことを意識するようになりました。今、「ふるさと」と聞いて思い浮かべる土地、「どうにかしたい」「役に立ちたい」と思える土地は釜石や東北。私にとってのふるさとができたのかなという想いがあります。

今いる地域と東北をつなぐ存在になる

宮本：今は、東北とはどんなつながり方をしていますか？

村井：仕事では2－3か月に1回くらい南三陸に行きますし、プライベートでも行きます。今年の7月からは、南三陸町復興応援大使の任命を受けました。何か決められた仕事があるわけではないけれど、名前に恥じぬよう南三陸町の魅力を発信していければと思います。

プライベートでも、南三陸の方たちが東京に来た時に案内したり、私の結婚式にお世話になった方をお呼びしたり、交流が続いています。そういう双方向の関係性は財産ですよね。人生が豊かになりましたね。

戸塚：社内の有志で成り立っている復興支援団体で活動しています。東北の食材を社食に使ったり、釜石の酒造をお呼びしたイベントを開催したり。また、内定者や社員の希望者を募って被災地でのスタディーツアーのコーディネートをしたり、先日も60人規模の役員研修を釜石・陸前高田で行ったのですが、その際釜石の部分のコーディネートを三陸ひとつなぎ自然学校と一緒に行いました。「そろそろ釜石の空気を吸わなきゃ！」と、プライベートでむこうを訪れることもありますね。月に1度くらい行かないと、心身のバランスが保てないんです。

橋本：私は、会社に戻って半年経つんですが、関わり方を模索している状況です。**ずっと思っているのは「この地域に、責任を持って関わりたい」ということ。**釜石は大好きな場所ですし、ちょっとしたらすぐ行きたくなる場所なんです。そんな自分の特別な地域に、どうしたら責任をもって関われるのか…ビジネスとして地域にお金を落とす仕組みを作ることなのかもしれないし、そうじゃないかもしれない。地域にとって何が必要なのかを理解して、どんな関わりができるのか。悶々と考えながら模索しているところです。

村井：**東京と被災地。どっちの「肌感覚」もわかるって、実はすごいことかもしれない。**メールでのやり取りひとつでも、東京の人は素早い返信が当たり前でも、地域の人たちはパソコンの前にずっといるわけではないし。**東京のルールで物事を進めた時に、地域の人がどう思うか。それがわかるから、双方の間に立つことができる**と思うんです。誰でもできることではないと思うし、これからのキャリアにも生きるといいなと思っています。

原文：田村真菜（NPO法人ETIC.）

http://www.etic.or.jp/drive/labo/3714

http://www.etic.or.jp/drive/labo/3715

2 震災から4年目、2014年度の方向性

■東北のリーダーたちとともに、復興・創造を担う人材が集い・育つ、持続可能な仕組みづくりを進めていきます。

東北には、これまでの 3 年間で生まれてきた多くの新しい可能性があります。地域内での自然エネルギーや経済の循環モデル、高齢化に向けた地域医療・福祉の取り組み、豊かな資源を活用した六次産業化、地域の歴史や伝統に根ざしたツーリズムなど、ひとつひとつの事業規模は小さくとも、その地域ならではの資源や特性を活かしながら、新しい顧客やマーケットを生み出した事業が生まれています。震災前から人口減少・高齢化が進み、経済が縮小してきていた東北においては、従来型の公共事業による雇用維持ではなく、このような新しい事業の創出（スタートアップ）こそが、次に続く担い手たちにとっての出番やチャンスを生み、そして未来への希望につながっていくと、感じています。こうした可能性を形にしていくための人材へのニーズは、継続的に私たちのもとに寄せられています。

そこで、震災から 4 年目を迎えるにあたり、今年度は「右腕派遣プログラム」のリニューアルと、東北のハブ機能の強化を重点テーマに取り組んで参ります。引き続き、未来の地域の担い手が育ち、持続的な復興が推進されることで、「東北をスタートアップの集積地」へと育んでいくことに取り組んで参りたいと考えています。

■ 2014年度の重点テーマ

2つの重点テーマ

（1）右腕派遣プログラムのリニューアル

（2）東北のハブ機能の強化

右腕派遣プログラムのリニューアル

- 東北で始まっている「**日本の未来に必要な事業づくり**」を応援するプログラムとして、**仕組みを再開発**する。
- エントリーする右腕人材にとって、**地域再生・活性化を担う人材**としての成長を促進するプログラムとして、**研修機能**を強化する。
- **東北のリーダーたちとともに**、外部からの人材を巻き込んでいくための仕組みとして、プログラムを育てていく。

東北のハブ機能の強化

- 2年間で東北の中から**モデルとなるハブ機能**を**3団体**創出する。
- 東北のハブ機能やコーディネート機能を担う組織・人材のための研修プログラムを開発し、沿岸部中心に10地域程度を巻き込む。
- **東北や首都圏の大学**などと連携し、被災地へのインターン派遣の仕組みを開発する。

3 2014年度の方向性とプログラム

■右腕派遣プログラム（対象：被災地域リーダー、都市部の社会人）

2014年9月11日時点で、「右腕派遣プログラム」を通じて、102のプロジェクトに192名の右腕人材（平均年齢30歳）を最長1年間派遣してきました。震災から4年目に入り、民間によるソフトへの取り組みが本格化していく中で、人材リクルーティングの難易度は質・量ともに高まっています。リーダーたちも、これまでに経験していない新規事業に挑む中で、組織力強化の課題を多く抱えています。それらの課題に対応する為、2014年度は、以下の方針で取り組んでいきます。

【目標】年間50名の右腕派遣実施

◆ 新しい価値創出に取り組む持続可能な事業への支援に特化

年に3回の公募選考方式での派遣先団体の選定に変更、活動支援金の1/2補助方式（派遣先団体の負担増）への移行を行い、よりこれまで以上に事業の持続可能性を重視した団体への支援に特化しました。

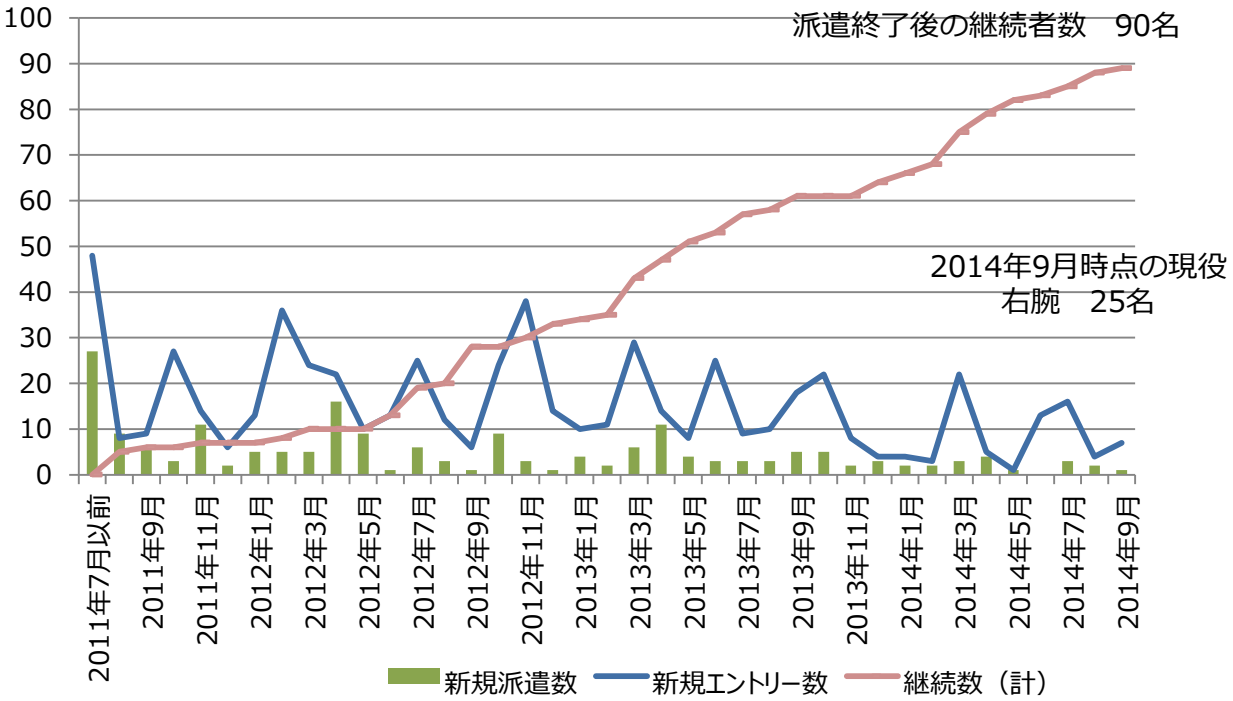
◆ 事業ブラッシュアップ体制の強化

これまでは、東京のETIC.スタッフが中心となり、派遣中の右腕のメンタリング等を実施してきましたが、現地コーディネーター体制を強化（3名⇒8名へ）しました。また、リーダーや団体として直面する課題への支援として、団体向け研修の強化を行います。

◆ 右腕向けのプログラム改善

右腕に対して、派遣前の不安を取り除いたり、スムーズなスタートが切ることを目的に、派遣前研修の導入します。また、これまでのケースを活用した学びのプログラムの開発に取り組みます。

■エントリー、およびマッチング数、継続者数の推移



■第1期公募での派遣先団体

2014年5月31日に、第1期の公募の最終選考会を開催しました。第1期では、以下の13団体を派遣先に採択しました。

	団体名	プロジェクト名	リーダー	地域
1	気仙沼地域エネルギー開発㈱	気仙沼地域エネルギー開発株式会社	高橋 正樹氏	宮城県気仙沼市
2	NPO法人東北開墾	東北食べる通信：CSA事業	高橋 博之氏	岩手県花巻市
3	フィッシャーマン・ジャパン	フィッシャーマン・ジャパン	赤間 俊介氏	宮城県塩釜市
4	株式会社IIE	地域ブランドIIE創出事業	谷津 拓郎氏	福島県会津坂下町
5	一般社団法人はまのね	蛤浜プロジェクト	亀山 貴一氏	宮城県石巻市
6	株式会社箱根山テラス法人設立準備室	箱根山テラス事業	長谷川 順一氏	岩手県陸前高田市
7	南相馬ＩＴコンソーシアム	南相馬ＩＴコンソーシアム	田中 章広氏	福島県南相馬市
8	NPO法人テラ・ルネッサンス	大槌復興刺し子プロジェクト	内野 恵美氏	岩手県大槌町
9	NPO法人Switch	未来志向型インターンシッププログラム	高橋 由佳氏	宮城県石巻市
10	一般社団法人ISHINOMAKI2.0	ISHINOMAKI2.0	松村 豪太氏	宮城県石巻市
11	気仙沼水産食品事業協同組合	「リアスフードを食卓に」プロジェクト	清水 敏也氏	東京、宮城県気仙沼市
12	NPO法人TEDIC	石巻の子どもの居場所作りプロジェクト	門馬 優氏	宮城県石巻市
13	宮城ダイビングサービスハイブリッジ	宮城ダイビングサービスハイブリッジ	高橋 正祥氏	宮城県石巻市

■第2期公募での派遣先団体

2014年9月21日に、第2期の公募の最終選考会を開催しました。第2期では、以下の7団体を派遣先に採択しました。

	団体名	プロジェクト名	リーダー	地域
1	有限会社ビッグアップル	yahoo復興デパート　一本松商店	関 欣哉氏	岩手県陸前高田市
2	小高ワーカーズベース	小高ワーカーズベース	和田 智行氏	福島県南相馬市
3	かーちゃんの力・プロジェクト協議会	かーちゃんの力・プロジェクト	渡邊 とみ子氏	福島県福島市
4	一般社団法人ピースボート 災害ボランティアセンター	仮設住宅向け無料情報紙「仮設きずな新聞」	岩元 暁子氏	宮城県石巻市
5	ガッチ株式会社	「大堀相馬焼」WAZAtoBAプロジェクト	松永 武士氏	東京都、福島県西郷村
6	Fish Market 38有限責任事業組合	Fish Market 38　（FM38）	吉田 恵一氏	宮城県気仙沼市
7	読書ボランティアおはなしころりん	移動こども図書館事業	江刺 由紀子氏	岩手県大船渡市

※2014年12月頃に、第3期公募を開始する予定です。

■みちのく仕事 右腕派遣プログラムマッチングフェア SUMMER（6月28日）

2014年度第1期の公募で採択された団体を中心に、15プロジェクトのリーダーと95名の参加者が集まった今回のマッチングフェア。冒頭のパネルディスカッションでは、「右腕」を経験してからリーダーを引き継いだ大槌復興刺し子プロジェクトの内野恵美さん、「東北食べる通信」を発行するNPO東北開墾の高橋博之さん、宮城県気仙沼市で投資額約20億円の木質ガス化発電プラントの推進に取り組む気仙沼地域エネルギー開発の高橋正樹さんの3名のリーダーに登壇頂きました。登壇者からは、「震災を機に人生を見つめ直して、日本ではじめての事業に挑戦出来るなんてチャンスはもうないのではと思って、新しい事業にチャレンジしました。」「今東北は幕末の京都みたい」など、熱いメッセージがあり、その後のブース交流会でも、熱心な質問がされていました。

■事業ブラッシュアップ合宿（7月26日～27日）

東日本大震災の被災地における「健康」に寄与する事業の創出・拡大を目的にジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社のご支援で実施中の右腕派遣プログラム5団体のリーダーと右腕を対象に実施。各事業の課題に対応した11名のメンターにご協力いただきました。

各事業ともにスタートアップ段階であり、サービスの形が定まり始めてきたものの、多くの事業は損益分岐点に達する以前の段階にありますが、派遣開始時点と現在の5団体合計を比較すると、売上は274万円→609万円、有給雇用は31名→50名、受益者数は412名→1,518名へと成長。年間のインパクトは売上約7,300万円、推定給与総計5,000万円と、成果が表れ始めています。

特にメンターブラッシュアップの満足度が高く、参加者からは「とても生きたアドバイスや気付きをいただいた」「客観的に事業を分析してもらえたことで今後の目標がよく分かった」とのコメントがありました。

■みちのく仕事 右腕派遣前研修 （8月24日）

2014年8月24日に東京で、今後右腕として活動予定の方を対象とした「右腕派遣前研修」を開催しました。右腕OBの意見を元に、“派遣前の不安の払しょく”“活動開始に向けたマインドセット”を目的に設定。今回は株式会社ラーニング・イニシアティブのご協力を頂き、プログラムを設計しました。当日は3名が参加し、“活動予定の地域・団体についてリサーチ・発表”や“これまでの経験を棚卸し、自身のスキルの整理”、“右腕OBが実際に陥ったケースを使用したディスカッション”などを実施しました。プログラム終了後の懇親会には右腕OB3名が参加し、“地域の文化”や“活動予定の団体について”など活発に情報交換が行われていました。「お金を出してでも受けておいて良かったと思える研修」との参加者の声を受けて、今後も派遣予定の方対象に実施していく予定です。

■みちのく復興事業パートナーズ “ものづくりセミナー”（9月11日）

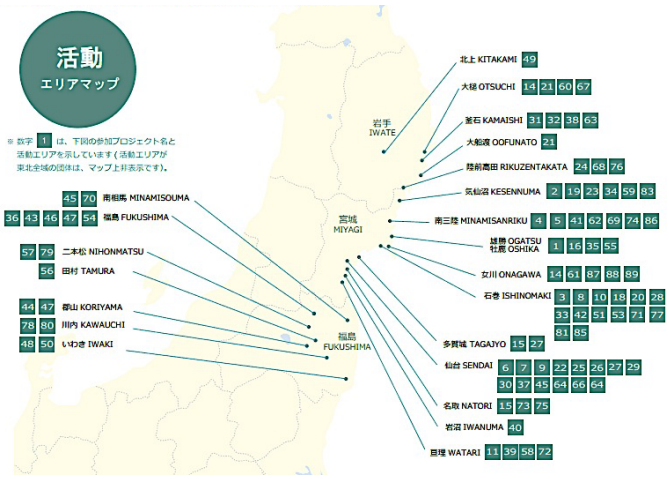
みちのく復興事業パートナーズ（注）は東京の電通本社で「ものづくり」に取り組む東北の事業者を対象にセミナーを開催しました。講師はビームス創造研究所本部長の南馬越一義氏。東北からは岩手・宮城両県から5団体が参加しました。
震災から3年半が経過し、被災地支援の文脈がだんだんと薄れていくなかで、ものづくりに取り組む事業者は「魅力ある商品」を作ることが求められています。セミナーでは専門家から具体的なアドバイスをもらいながら、それぞれの団体がどのような方向性でものづくりに取り組むかを検討しました。
参加した団体からは「誰をターゲットにするのか、どのような価値を打ち出し、どのレベルの価格を設定するのかなど、専門家ならでは意見が大変参考になった」という声が聞かれました。

（注）みちのく復興事業パートナーズ＝企業が連携し、被災地で復興に取り組むリーダーらを支援する枠組み。ETIC.が事務局を担い、味の素、いすゞ自動車、花王、損害保険ジャパン日本興亜、電通、東芝、ベネッセホールディングスが参画している（2014年10月現在）。

5 プロジェクトの進捗

2014年9月11日の時点で、102のプロジェクトに192名の右腕人材を派遣してまいりました。派遣期間（1年間）が終了した右腕人材（社会人に限定）の約60％が継続して被災地に残り、そのうち15名は自ら起業するなど、彼らは被災地での重要な役割を担いつつあります。現役（派遣期間中）の右腕とあわせると、現在105名の人材が、東北の担い手として活動を行っています。

2013年に新たに設定した、「5年で300名」の派遣に向け、今後も精度の高いマッチングと各種サポートを行ってまいります。



6 ご支援・ご寄付のお願い

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、現在のご寄付・助成金等の総額は、入金見込額も含めて、748,135,718円という多額のご支援をいただいております。この場をお借りしまして、改めて心より感謝申し上げます。本プロジェクトは、当初、2013年度末までの3年間を目安に取り組んでおりました。しかし、東北の復興が本格化していく中で、中核事業である右腕派遣プログラムへのニーズは、更に高まってきており、2015年度末までの中長期計画を策定しました。右腕派遣は初期に設定した目標から、「5年で300名」へと上方修正しております。目標の変更に伴い、2015年度末までの2年間で約4億3千万円の支出を見込んでおり、残り1億3千万円ほどの資金調達に向けて、改めて資金調達戦略の強化を実施してまいります。皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしくお願い申し上げます。 **>>寄付ページURL**

http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/donations_support/please_donate

《ご寄付の受付》

■信頼資本財団「震災復興リーダー基金」
http://www.shinrai.or.jp/fukkou-shien/etic2/
※公益財団法人である信頼資本財団は、特定公益増進法人に該当するため、寄付者の税は確定申告をすることによって寄付金控除の優遇措置を受けることができます。

■Global Giving
http://www.globalgiving.org/projects/sponsor-fellows-for-tohoku-and-japans-recovery/
※米国在住の方は、GlobalGivingから寄付していただくと、税控除を受けることができます。

■American Express（メンバーシップ・リワード）
http://catalogue.membershiprewards.jp/viewAwardDetail.mtw?productId=4487681&categoryName=jp_21a_charity_tohoku
※アメリカン・エキスプレスのカード会員さまは、ポイントによる寄附ができます。

連絡先・お問い合わせ先

◆NPO法人ETIC.内　震災復興リーダー支援プロジェクト 事務局（担当：山内・押切）

東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階

mail：fukkou@etic.or.jp　Web：http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html